



# 「儉約」とは何か

## 石田梅岩の思想と行動

江戸時代の思想家、教育者である石田梅岩の教えには、日々の暮らしと密接に結び付いた「学び」の本来の姿がある。人の人たる道を説き、よりよく生きるために自らの「心」を問い直すその教えは、経済の混乱に揺れる当時の民衆を魅了し、日本全国に広がった。現代に至るまで「石門心学」として継承される思想のエッセンスを「儉約」の意味に探り、梅岩自身の実践をたどり直すことで、これから学びの在り方を考える。

高野 秀晴  
Takano Hideharu



石田梅岩遺品。右端の香炉では、線香を焚いて時間を計っていた。所蔵／明倫舎

### 学びと暮らしの関係

本来学びとは、よりよく生きるための営みであり、日々の暮らしと密接に結び付いているはずである。学びは日常の暮らしのなかから生まれ、日常の暮らしに寄与してゆく。ところ（一）

である。合格という結果は、その人に達成感やその後の意欲をもたらすかもしれないが、学びそのものがその人自身にどのような意味をもたらしたかまでを示してくれるわけではないのである。

以下、学びと暮らしの在り方を考えていくにあたって、江戸時代の思想家、教育者である石田梅岩（1685～1744）にスポットライトを当ててみたい。梅岩は、一町人として日々の仕事に励む傍ら、ほぼ独学で学問を学び、静坐をするなどの修行に励んだ。その結果、自己と世界とが一体化するといふある種の神秘的な体験を遂げたのだ。ところが、そうした体験をもとに梅岩が人々に説くのは、「儉約」や「孝行」というなんとも身近でありきたりの内容であった。その教えは、町人を中心とする当時の人々に受け入れられ、弟子たちは、それぞれの家業に励みつつ、梅岩の教えを学び合う学習組織を形成していったのである。今日、その教えは、石門心学と呼ばれている。

### 「人の人たる道」

まずはじめに、石田梅岩の生涯について簡単に触れておこう。梅岩は、1685（貞享2）年に丹波国桑田郡東郷村（現在の京都府亀岡市東別院町東郷）に生まれた。農家の次男であった梅岩は、11歳で京都の商家に奉公に出



「梅岩講釈の図」（『石田勘平一代記』より）。石田梅岩による講釈の様子。当時としては珍しく男女が共に聴講する姿が描かれている。所蔵／明倫舎



石田梅岩の肖像画。人の人たる道を説く梅岩の教えは、心の支柱を求める。当時の人々を魅了した。所蔵／明倫舎

が今日、学びと暮らしの関係は必ずしも明確とはいえない。例えば、ありきたりの話だが、受験に備えて勉強に励み、その結果、志望校に合格したとする。確かにその勉強は、その人の境遇を変え、将来を明るいものにするかもしれない。けれども、志望校合格という結果は、その人の学びの質や量をその人以外の人や組織が評価したもの（一）

た。奉公先の都合で一旦帰郷するが、23歳の時に再び京都に出て、呉服商に奉公に入った。

弟子たちがまとめた『石田先生事蹟』によれば、2度目の奉公に出た時、梅岩は「人の人たる道」を説き広めたいという志を抱いていたという。どうしてこのような志を抱くようになったのかは謎であるが、「人の人たる道」を説くのであれば、まずは自らが「あまねく人の手本」になる必要がある。だから梅岩は、実直に仕事をする傍ら寸暇を惜しんで勉強に励んだ。朝は誰よりも早く起床し読書に励み、夜は周りが寝静まった後も勉強したという。

では、梅岩は何を勉強したのだろうか。当時、学問といえば儒学を指すことが一般であり、梅岩も『論語』や『孟子』といった書物に親しんだと考えられる。問題は、それらの書物から何を読み出そうとしたかである。後に梅岩は、「心ヲ知ルヲ学問ノ初メト云」と述べている（『都鄙問答』）。ここでいう「心」とは、人間の本性とでもいった意味である。つまり、自己の本質を問うことが梅岩にとっての学問の出発点であった。

### 「心」に立脚する学び

ところで、学びが「心」の思索へと向かっていったのは、梅岩の時代にお

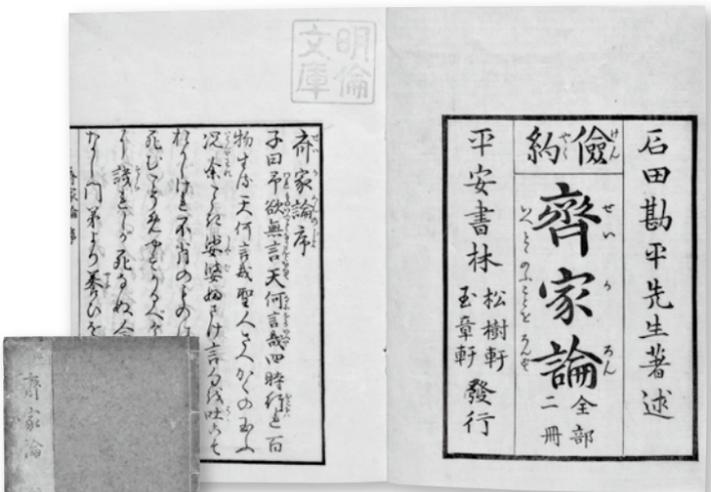
いて珍しいことではなかった。ここで時代背景を少し踏まえておくことにはしたい。

石田梅岩が活躍した元禄・享保時代は、急激な商業化の進展とともに経済的な混乱があちこちで生じた時代であった。たとえ家計が安定していても10年後にはどうなっているかわからない。そのような状況のなかで、多くの庶民は自分の家が没落してしまうのではないかとという危機意識を持つようになった。そして、その危機意識を乗り越えるために、人々は新たな生活規範を求めて勉学に励んだのであった(安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー、1999年)。

したがって、その勉学は、単に家業に求められる実用的な知識や技能を習得するといったレベルにとどまるものではなかった。「心」に立脚点を求めることにより、自らの生き方にゆるぎない信念を得たいとする庶民の願望がそこにはあったのである。

梅岩の熱心な学びは、このような時代背景の中で進められたのだが、商家の奉公を辞めてまで学びに専念していたことが梅岩の特異なところであったといえる。35、36歳の頃から、梅岩は師となる人物を探し求めるようになり、小栗了雲という老僧に出会った。梅岩は、了雲に「心」についての議論を挑んだが、一蹴されてしまう。それから梅岩は修行に専念するようになり、

奉公を辞するに至るのである。そしてやがて梅岩は、2度にわたる開悟を体験することになる。開悟により梅岩は、自己の「心」が天の意思のもとにあること、したがって、自己の「心」こそが生きるうえでの究極的な規範である



石田梅岩著「齊家論」。右の「石田勘平」は梅岩の通称。弟子たちは本書から儉約の思想を学んだ。所蔵/明倫舎

## 「儉約」のもつ意味

梅岩は、人々に「心」を知ること求めた。「心」を知れば、確固たる信念のもとで暮らしに向き合うことができる。そして、その暮らしは「儉約」にもとづくものになるだろうと梅岩は言う。

梅岩の著書『齊家論』によると、弟子たちが梅岩から学び取った最も大きなことの1つは儉約についてであったようである。では、梅岩が説き、実践する儉約とは、どのようなものだったのだろうか。『石田先生事蹟』には、梅岩の日頃の行状が紹介されている。一例を挙げると、茶殻は捨てずに「ひたし物」にして食した、古くなった障子紙を「廁のおとし紙」に用いた、鼠に供するため米のとき汁を捨てずに外に溜め置いた、などである。一見すると、儉約というより「ケチ」でも言いたくなるような行状である

観的に過ぎるものかもしれない。だが、ここで大事だと思うことは、自分が儉約することの意味が「天下」との関連のもとに示されていることである。障子紙を再利用することや米のとき汁の使い道が世界の動きとの確かな関連のもとに位置付けられているのである。そして、このような意味での儉約を實踐してゆくためには、絶えざる学びが不可欠だというのが梅岩の教えであった。

## 未熟だから学ぶ

職を辞してまで教育活動に没入していった梅岩に対し、弟子たちはそれぞれの家業に励みながら、学びを深めていった。その中心となったのが手島堵庵(1718~1786)である。京都の裕福な商家に生まれた堵庵は、18歳の時に梅岩に出会い、その2年後に「心」を知るに至った。けれども、堵庵が梅岩の教えを説き広める教育活動を本格的に始めたのは、1764(宝暦14)年、47歳になってからであり、それまでは家業に実直に励むことを優先したのであった。家業にしっかりと取り組むこと——それは師匠梅岩の教えを實踐することでもあった。

堵庵は、家業を退いたのちに教育活動を開始したのだが、梅岩のような器量を持ち合わせていないと考えた堵庵は、自身の教えを「学びがてら」の講

釈と呼んだ。堵庵は、教えを求めてやってくる者たちと師弟関係を結ぼうとはせず、「朋友」と呼んだ。そして、才能と徳が乏しいと自覚するがゆえに、ともに学び合うことによって、梅岩の教えを實踐していこうと考えたのである。

堵庵は、朋友たちの学びの会を「会輔」と呼んだ。会輔という語は、『論語』顔淵篇の「君子は文を以て友を会し、



手島堵庵の肖像画。梅岩の教えを全国各地に広めた。所蔵/明倫舎

友を以て仁を輔く」という文言を典拠としている。この文言から堵庵は、「友によらざれば道にす、みがたし」というメッセージを読み取ったのであった(『会友大旨』)。

会輔では、事前に出された日常に即した問いに対し、参会者が回答を持ち

特集/昔の暮らし

梅岩の教えは、広範な地域に普及していくことになったのである。

## これからの学び

清貧の生活を貫いた梅岩の学びは、利益やステータスといったものの獲得

かもしれない。だが、梅岩は、「儉約」と「ケチ」を明確に区別している。最後の鼠の例に見て取れるように、梅岩の儉約は決して私腹を肥やすための行いではなかった。むしろ逆である。

梅岩によれば、儉約すると自分が節約した「財宝」が世に「アマル」ことになる。こうして天下に流通する余財が増えていけば、餓死する者もいなくなるだろうし、民も豊かになるだろうというのである。とすれば、儉約という言葉は「施し」という意味を帯びてくることになる。実際梅岩とその弟子たちは、京都で貧窮者が続出した年に、精力的に施行活動を行ったのであった。梅岩らに言わせれば、この施行もまた儉約ということになるだろう。

儉約を財の流通ととらえた梅岩は、商業の社会的意義を積極的に主張した。例えば、私たちは、粗悪品を購入してしまった時、使ったお金がもったいないと感じる。ならば、自分が商品売る側になった際には、相手にそのような思いをさせぬよう、良い品を作ればよい。そうすれば、相手もお金をもつたいたいと思わないだろう。すると、お金は「天下」に流通することになり、「万物」が養われることになる。このことを梅岩は「万民ノ心ヲ安ズル」と表現している(『都鄙問答』)。

自身の節約から万民の安泰へ。生き方としてのエコとも言うべき梅岩の考え方は、今日の私たちから見ると楽を目指すものではなかった。自らの「心」を問い直し、自らの暮らしに密接に結び付いたものであった。そして、弟子たちは、自らの未熟さを自覚しながら、梅岩の教えを互いに学び合い、それぞれの暮らしに向き合っていた。才能や財力を前提とはしない学びの姿がそこにはあったといえるだろう。はじめに述べたように、本来学びとは、富や威信の獲得自体を目的とするものではない。暮らしを問う中から生まれるのが学びであり、特別な才能が必要であるわけではない。これからの時代には、富や才能を前提としない学びの在り方がますます求められることになるだろう。

各地に設立された講舎は、幕末維新期に廃絶したものが多く。だが、明治以降も存続した講舎や後に再興された講舎、そして、本誌で紹介されるように、今日も活動を続ける講舎もある。その活動には、これからの学びを考えるうえで大きなヒントがあるはずである。

Takano Hideharu

たかのひではる/1977年、広島県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(教育学)。現在、仁愛大学人間生活学部准教授。日本教育史、日本思想史専攻。著書に、「人物で見る日本の教育」(共著、ミネルヴァ書房)、「教化に臨む近世学問——石門心学の立場」(べりかん社)がある。

